

大型クラゲ分布調査

(有害生物出現情報収集・解析及び情報提供委託事業)

石原成嗣

1. 目的

日本沿岸に大量に来遊し、大きな漁業被害を与える大型クラゲの出現状況を、試験船並びに漁業取締船による洋上調査、操業漁船からの聞き取り調査等により把握する。また、当該情報をまとめ、漁業関係者に迅速に情報提供を行うことで漁業被害の低減に努める。

2. 方法

(1) 大型クラゲ沖合域分布調査

2024(令和6)年8月19日～20日にかけて、試験船「島根丸」によりLCネット(網口の幅×高さが10m×10m)を用いた調査を行った。調査は添付資料「2024年度大型クラゲ分布調査結果」(以下同じ)図1の定点にて実施し、LCネットを水深50mまで沈め、1分間斜め曳きを行った後、巻き上げ速度毎秒0.3mで揚網した。また、曳網中に下記洋上目視調査と同様の方法で目視調査を行った。

(2) 洋上目視調査

7月24日～25日にかけて、試験船「島根丸」で船上から目視による調査を実施した。調査は添付資料図2の定点にて実施し、2マイルの距離を航走する間、船橋上両舷から目視されたエチゼンクラゲを大(傘径100cm以上)、中(傘径50～100cm未満)および小(傘径50cm未満)のサイズ別に計数した。また、7月～11月には漁業取締船「せいふう」の航行中に、定点を定めずクラゲ来遊状況の目視調査を行った。

(3) 陸上調査

7月～10月の間、水産業普及員により、漁業協同組合JFしまね各支所等へ電話による情報収集を行い、水産技術センターで情報の集約を行った。

3. 結果

(1) 大型クラゲ沖合域分布調査

曳網調査で1個体の大型クラゲが入網した。目視では確認されなかった(添付資料表1)。

(2) 洋上目視調査

試験船による調査では、計6個体の大型クラゲ

が確認された。また漁業取締船による調査では、全期間で計16個体の大型クラゲが確認された(添付資料表2)。

(3) 陸上調査

2024年度に日本近海で初めて大型クラゲの出現が確認されたのは、6月24日の対馬であり、定置1経営体あたり最大2,000個体の入網が確認された。出現時期が早く、量も多かったことから、史上最大の出現量であった2009(平成21)年並みの大量出現の可能性も示唆されたため、情報収集体制を強化した。例年8月～9月に月2回程度実施していた電話による情報収集を7月中旬から行ない、頻度も8月～9月の間は週1回に増やした。

県内では7月10日に隠岐で大型クラゲの出現が初確認された後、県内各地から出現報告が続いた。定置、まき網、沖合底びき網、小型底びき網等に入網があり、漁獲量減少、漁獲物の品質低下等の漁業被害が報告された。定置では8月まで断続的に数100個体/網程度の入網が確認されたが、9月に入るとともに急速に減少した。まき網では7月下旬に数10トン/網の入網が続いたが、定置と同様に9月に入るとともに急速に減少した。沖合底びき網では8月中旬、小型底びき網では9月初めと、それぞれ禁漁期明けから数10～数100個体/網の入網が続いたが、9月下旬から減少し、10月に入網はほぼ終息した(添付資料表3)。

本年は2010(平成22)年以来、最多の大型クラゲ出現量となった。しかし2009年の大量出現時と比べると、出現期間が短かったことから大幅に少ない出現量で終息した。

4. 成果

調査結果は、(一社)漁業情報サービスセンターに提供し、大型クラゲ出現情報として活用された。

また、「大型クラゲ情報」として、漁業協同組合JFしまね各支所等を通じて、漁業者へ情報提供を行った。例年「大型クラゲ情報」は年数回程度発行しているが、本年は大量出現した年となつたため、例年より多い計13回の発行を行った。